川上 高司 ブログ アーカイヴ

2017年

1月12日

崖っぷちのテラーソン

１１日、上院外交委員会では、国務長官に指名されたレックス・テラーソンの公聴会が開かれた。アメリカでは国務長官や国防長官など主要な役職には議会の承認が必要である。2012 年、国防長官に指名されたチャック・ヘーゲルが軍事委員会で 8 時間に及ぶ公聴会で厳しい質問にさらされ、史上まれに見る「荒れた」ものになったことは記憶に新しい。

今回のテラーソンの公聴会は 3 時間ではあったが、共和党からも民主党からも「不支持」ありきのはじめから敵対心むきだしの厳しい公聴会となった。他の長官の公聴会がジョークが飛びかうなどフレンドリーであったことから、テラーソンの公聴会はとりわけ異様だった。

特に厳しい姿勢を示したのがフロリダ州議員のマルコ・ルビーオである。自らも大統領選挙に出て撤退、トランプ当選後は国務長官指名もありかと期待もされていた人物だけにテラーソンへの追及もひときわ熾烈だった。

特にテラーソンが追及を受けたのがロシアとの関係だった。エクソン社の CEO であったテラーソンはロシアへの経済制裁を回避させようと議会に働きかけたというのが焦点となった。ルビーオは「プーチンが戦争犯罪人だったらあなたはどうする？戦争犯罪に加担したと思うか」などとプーチンとテラーソンの関係にも追及の手を緩めなかった。

それに対してテラーソンは「私の価値観はあなた方と一緒だ」と防戦に手一杯で終始守勢に立たされた。グローバル企業の CEO としての経験豊富なテラーソンにしてみれば、若いルビーオに責め立てられる一方では屈辱だったに違いない。

もしルビーオがテラーソンを支持しなければおそらく外交委員会の承認は得られず、議会での承認も不可能だろう。そうなればトランプ政権はスタート時点で大きくつまづくことになり、議会との関係にも暗雲が垂れ込める。

だが、テラーソンもこのままでは終わらないだろう。公聴会で打ちのめされていては世界でタフな交渉はできない。次の公聴会での反撃が楽しみである。

1月14日

それぞれの公聴会

1 月 20 日の就任式を前にワシントンは多いに盛り上がっている。長官指名の公聴会は議員にとってもハレの舞台である。4 年に一度、注目を集める公聴会は自己アピールする最善のステージとなっている。今回はトランプ指名の各候補はそもそも歓迎

されない人々だけに公聴会でも議員は言いたい放題だったようだ。
最も注目を浴び鮮やかな印象を残したのは上院外交委員会のマルコ・ルビーオだろう。自らも大統領選挙に出ているだけに知識と貫禄は豊富、見栄えのするスタイルと鋭い舌鋒はすでに次期大統領としてのアピールに十分だった。
荒れたのは国務長官指名だけではなかった。他にも血祭りに上げられた候補がいる。住宅郊外開発庁長官（HUD）指名のベン・カールソンは大統領選挙にも出馬していたにもかかわらず、ルビーオと反対に追及されて追い詰められてしまった。上院融資委員会の言い分はこうだ。トランプ次期大統領やその一族の不動産事業と癒着するのではないか。「1 ドルたりともあの一族に儲けさせることは本当にしないか？」と厳しい言葉で問いただされて、カールソンは「国民の利益あるのみ」と応戦するのが精一杯だった。
指名時から批判の声が高かった、司法長官候補のジェフ・セッションズも司法委員会で厳しく問われた。反イスラム、移民排斥、女性差別、LGTB 差別発言などが後を絶たず、とりわけ公正さと公平さを求められる司法の場に差別主義者はあり得ない、と敵意ありきの公聴会となった。「あなたはすべての国民に平等であることを保てるのか」と厳しく追及され、承認が難航する可能性も出てきた。
一方でフレンドリーな公聴会となったのが国防長官指名の元海兵隊大将ジェームズ・マティス。軍事委員会のマケインも退役軍人であることから穏やかな雰囲気だった。退役軍人が国防長官に就任するには退役後 7 年間の空白が必要だが、マティスの場合はそれも問題となることなく承認もすでに得られている。
返り討ちにあわせる強者もいた。CIA 長官指名のマイク・ポンペオは退役陸軍情報将校だが、終始冷静冷徹で厳しい質問にも動じなかった。CIA が大統領からの介入を受けることはないかという質問に対しても「トランプの介入は受けない。CIA は独立を保ち政治的にはならない」と短くピシャリと答えて相手を封じた。情報将校らしく無駄口はたたかない。
すべての公聴会が終わったわけではないがこうして見ると意外に適材適所の人選となっている。トランプ政権の運営が楽しみである。

1月22日

世界に逆風が吹き荒れるトランプ大統領の就任

トランプはやっぱりトランプだった。20 日、ワシントンでは第４５代トランプ大統領の就任式が行われた。さすがに緊張した面持ちでトランプは就任式に臨んだ。その就任演説もまたトランプらしいものであった。
演説ではワシントンエスタブリッシュメントから政治を国民に取り返すといい、富も夢も仕事もアメリカ国民に取り戻す、「brin back to you」を連呼していた。そしてもはやトランプの標語ともなっている「アメリカファースト」と「再び偉大な国にする」を約束した。問題はトランプがいう「you」がいったい誰をさすのか、ということにある。
就任式を見ようと集まった人々は、８年前とは大きく様子が異なっていた。そこには白人がほとんどで黒人の姿はなかった。８年前には１８０万人がこのワシントンに集まって歴史的な就任式を目の当たりにした。その多くが黒人だったのだ。

今回の就任式では議員らの欠席が相次ぐという異例の事態だった。前日には反トランプのデモが暴徒化して不穏な空気に包まれていた。モールも閑散としており、決して明るくはないスタートとなった。それもそのはずで、2009 年の就任式では当日ワシントン地区の地下鉄の利用者数は 51 万 3000 人だった。オバマ人気に陰りが見えてきた 2013 年ですら 31 万人だった。さらに言えば不人気大統領として名を残したブッシュ大統領の 2005 年の就任式ですら 19 万 7000 人はいた。

さらに就任式後にはワシントンでは反トランプを掲げる女性達によるデモ行進が行われた。このデモには映画監督のマイケル・ムーアなども参加して反トランプをアピールした。さらにはこのデモに連動して女性達のデモはアメリカ国内だけでなく全世界の主要都市でも起こり、トランプの女性差別に対して抗議の意を表明した。まさに世界中で逆風が吹き荒れる中でのトランプ政権のスタートとなった。

ピューリサーチセンターの世論調査によれば、2017 年には状況が良くなると期待すると答えたのは４９％、悪くなると答えたのは４２％だった。その理由はどちらも「トランプが大統領になったから」だ。

すでにアメリカ社会の分裂は深く大きくなっている。そのアメリカの分裂をどう修復していくのか、トランプ大統領の課題は重い。

1月27日

古代からのテーマが復活ートルコはアジアかヨーロッパか

2016 年 11 月、トルコのエルドガン大統領はウズベキスタンからの帰国途上、「トルコは何が何でも EU というわけでは・・・SCO（上海協力機構）もあるし」 と記者団に漏らした。 この意味深な発言はこの先の大きな地殻変動を予言しているかもしれない。

トルコは長年ヨーロッパとの関係を重視し、NATO に参加し EU にも加入しようと努力してきた。もっとも EU には拒否されたが。そのトルコがどうやらアジアに目を向けるようになってきたのだ。上海協力機構とは、中国、ロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジクスタンの 5 カ国が発足させたユーラシアの経済協力機構である。現在はウズベキスタンが加入し、オブザーバーとしてモンゴル、イラン、ベラルーシ、アフガニスタン、インド、パキスタンが参加、2012 年からはトルコが会議参加国となっている。いわばユーラシアを網羅する広汎な国際機構である。この SCO にトルコが正式加盟すれば、ヨーロッパからユーラシアにかけての地殻変動が起きる。

トルコは EU 加盟を実現するべく、国の民主化を進めイスラム色を薄めて世俗主義を採るなどの努力をしてきた。しかしそれが拒否されると次第にエルドガン大統領はイスラム色を強め独裁色を押し出すようになってきた。さらにヨーロッパの反イスラム傾向、反移民、反シリア難民などのナショナリズムの台頭で関係が悪化、トルコにとってヨーロッパの魅力は薄れてきたといえる。

そこへロシアが外交攻勢を強め、関係の改善を進めた。シリア問題で対立しつつも爆撃機が撃墜されても、大使が殺害されても外交を荒立てず穏便にすませる一方、パイプラインやエネルギー問題で圧力をかけてトルコを取り込んでいった。ロシアの狙いはトルコを NATO から引きはがして安全保障上の不安を取り除き、パイプラインのハブとして自由に活用できるようにしイスラムテロとも共闘していくことにある。

トルコはシリア問題でもロシアと妥協しアサド大統領の存続を認めるかもしれない。そうなればシリア内戦は一気に解決に向かう。

ヨーロッパにとってはトルコの NATO 離脱はイギリスの EU 離脱よりも衝撃が大きいだろう。いままさに古代からのテーマ、トルコはアジアなのかヨーロッパなのか、というオセロゲームが始まろうとしている。